

看護力を、経営力に。

看護を可視化する

JA 茨城県厚生連総務部人事教育課看護支援室 中西京子、吉田公代

「7対1看護」「クリニカルパス」「DPC」等、昨今の医療改革は病院経営における看護師の役割と責任を格段に高めるものである。諸改革の根底に流れる「患者中心の医療」「チーム医療」という考え方は、患者に一番近い存在である看護師に、医師、コメディカル等医療者間の調整役を引き受け、患者との円滑なコミュニケーション、良好な信頼関係の構築を期待しており、病院経営に対する看護師の主体的、積極的参加が欠かせない。

しかし、その一方で看護師の社会的評価は未だ十分とはいえない。そのことは高い離職率、潜在看護師問題、男性看護師の少なさに端的に示されている。看護職は子供の「将来の夢」で常に上位だが、特に茨城県では看護師を希望する中高生の数が減少傾向にある。看護の価値が「見えてない」からなのではないだろうか。

したがって、看護支援室の活動として従来の人材確保、離職防止と並んで、看護を可視化し、地域社会に対しその存在をアピールすることが第三の柱として位置づけられている。JA 茨城県厚生連では看護師自らが進路選択を控えた中高生を対象にガイダンスを行い、看護師の魅力や現場の実際を語り、優秀な人材を早期に発掘・育成する（地産地消型人材確保戦略）、食育と健康をテーマに地域住民とのふれあいの機会を作り（JA 農協との医食コラボレーション）、看護師が専門性を生かし脳や肺等を鍛えるオリジナルエクササイズ（「肺（袋）を鍛え、健康“息イキ”袋操（たいそう）※注」）を考案するなど、看護師の素晴らしさと可能性を追求する全方位的活動が展開されている。

看護支援室による対外的活動は現場看護師の誇りや士気を高められる効果が期待されるだけでなく、リクルート効果を最大限に発揮することで、病院経営を強化し、看護師、医師、そして患者に選ばれる病院づくり（日本版マグネットホスピタル）のための起爆剤ともなりうるのではないだろうか。

※注）「袋操（たいそう）」とは「COPD（慢性閉塞性肺疾患）」の啓発を目的とした、呼吸療法士でもある看護師が考案した、「レジ袋」を使った、子供から大人まで誰もが楽しめる、お手軽・簡単エクササイズである。

http://www.ibaraki-np.co.jp/47news/20090623_05.htm